

# メガイアワビの放流技術開発

(増殖技術開発事業)

佐々木 正・山根恭道

## 1. 研究目的

栽培対象種であるメガイアワビについては平成7年度から本格的に開始されているが、その放流効果は明確になっていない。そこでメガイアワビの放流効果を把握すると共に効果的な放流方法の検討を行う。

## 2. 研究方法

### (1) 種苗放流追跡調査

多古地区の通称上が原の水深2~7mにおいて、放流サイズ、時期を変えて実施した放流群(小型群:平均殻長21mm・平成12年8~9月放流、大型群:平均殻長42mm・平成13年2~5月放流)について、7月と10月にスキューバ潜水による追跡調査を実施した。調査方法は放流区域において岸から沖に向けて長さ100mの調査ラインを2本設け、ラインに沿って4mの幅で発見した放流アワビについて殻長、体重等を記録した。種苗放流の直後には放流区域にタコかごを設置し、食害種であるマダコの駆除を行った。

### (2) 放流個体の漁獲物混獲率調査

島根町漁協多古地区および多伎町漁協において水揚げされたメガイアワビについて放流個体の混獲状況の調査を実施した。

## 3. 研究結果と考察

### (1) 種苗放流追跡調査

大型群の発見率<sup>\*1</sup>は7月の調査では18%であったが、10月の調査では5%と低下した。小型群の発見率も7月の調査では2%であったが、10月の調査では発見率1%と低下した。7月の調査では大型群の死殻が比較的多く回収され、死殻の18%にはタコの食害痕が観察された。タコかごでも多くのマダコが捕獲されたことから、マダコによる食害の影響があったものと考えられた。

放流貝の成長および発見密度を2~3m、3~5m、5~7mの各水深帯で比較すると、成長は水深が浅い程良い傾向が認められ、放流から約1年を経過した小型群の10月の調査では、水深2~3m、3~5mおよび5~8mの平均殻長はそれぞれ41mm、38mm、34mmとなった。発見密度は水深2~3mと3~5mはほぼ同様の値であったが、水深5~8mは前者の1/2~1/20と低い値を示した。水深5~8m帯の放流貝の成長および発見密度が他の水深帯より劣った原因としては、小型海藻の餌料不足による影響が考えられた。

### (2) 放流個体の漁獲物混獲率調査

多古地区の放流個体の混獲率は17%であり、前年とほぼ同様の値であった。多伎町漁協の放流個体の混獲率は83%(227個測定中188個が放流個体)であり、前年の46%より大きく増加した。この原因としては、放流個体の殻長組成から平成9年放流群の加入により混獲率が上昇したのと考えられた。

\* 1 : 発見率 = 発見された放流貝の密度 × 100 / 放流直後の放流貝の計算上の生息密度 (1.67 / m<sup>2</sup>)